



TITLE:

母娘関係の臨床心理学的考察－問
われるべきその現代的意義－(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

高石, 浩一

CITATION:

高石, 浩一. 母娘関係の臨床心理学的考察－問われるべきその現代的意義－. 京都大学, 2020, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13313>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	高石 浩一
論文題目	母娘関係の臨床心理学的考察 —問われるべきその現代的意義—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、母娘関係に焦点を当て、筆者の心理臨床体験に基づく「ナルシシステック・コントロール」、「マゾヒスティック・コントロール」の理論的裏づけをはかるとともに、母娘関係から見た諸研究の現状をもとに、新たに課題となってきた幾つかのテーマについて考察し、それらに通底する母娘関係の今後の展開について言及するものである。</p> <p>第1章では母娘関係に関連する諸研究の概観から、愛着や世代間伝達、アイデンティティといった従来の心理学研究の現状を確認し、また母娘関係に葛藤を抱えたクライアントとの臨床実践に基づく研究状況についても言及している。</p> <p>第2章では Jung の分析心理学的な観点から見た母娘関係にかかわる諸研究を吟味検討し、次にフェミニズムの観点から母娘関係にかかわる諸問題について、Hirsch（1989/1992）を援用しつつ、女性の発達という観点から議論している。</p> <p>第3章では、1997 年の筆者の著書『母を支える娘たち』で紹介した上記の「ナルシシスティック・コントロール」と「マゾヒスティック・コントロール」の発想の経緯と理論的肉付けを試みている。臨床的な経験に基づく両概念が、従来のナルシシズムとマゾヒズムの研究の流れの上にどのように位置づけられるかを検討し、さらに両コントロールの不幸な組み合わせを「共依存」という形で読み直し、臨床への提言を行っている。</p> <p>第4章では、上記の両概念の発想の根拠となった筆者の事例を取り上げるとともに、母娘関係にかかわる様々な主題を持つ臨床事例について報告している。それらは母からの「自立」「妊娠」「介護」といったライフイベントに関連する事例であり、さらに現代的な主題である「セクシュアル・マイノリティ」の事例を含む臨床実践である。これらの主題は先達の諸事例のメタ分析や、母娘に関連する漫画、小説、自伝的エッセイなどの諸作品の分析によってさらに明確化、前景化されている。</p> <p>第5章においては、科学技術の進歩による母娘関係にかかわる現代的な諸問題を、「不妊治療」「リプロダクティブ・ライツ」「セクシュアル・マイノリティ」といった具体的な切り口で掘り下げている。とりわけ身体性に深く関連する「妊娠」「出産」をめぐる生殖補助医療の技術的進歩は、母親の在り方や心構えを大きく変え、それに対応した形で心理士（師）が関わる際の知識や倫理的態度も専門化されるようになってきた。また、セクシュアル・マイノリティにおける「子を持つ権利」や、子</p>			

供の側の「出自を知る権利」といった諸問題についても、臨床心理学的に考察すべき課題として提起されている。併せて第5章では、第3章の延長上で、発達障害を疎外しがちな学校風土の問題についても言及している。

こうした現代的な諸問題は、男女という性別二元論を超えようとする Haraway (1985/2001) や Butler (1990/2018) によって予見されていた多様な社会の到来を特徴づけるものではあるが、同時にそれは鶴見和子や河合隼雄によって「マンダラ」的思考として語られていた共生の思想にも通じるものである。

そこで第6章では、マンダラをめぐる両者の交流と思想的発展から、未来に向けて我々が汲み取るべきものは何か、について改めて吟味検討を行っている。それは地球上における共存と共生の思想であり、なおかつその中でダイナミックな変容をもたらす契機が何か、という問いかけをはらんだ発想である。もちろんこれは、心理臨床を生業とする者にとって、個人レベルで心理療法論と通底する発想でもある。

終章として、我が国の文化的風土を形成し、特徴づけている母娘関係に基盤を置いた「女性の目」が、現代的な諸問題の背景に大きく横たわっている現状を認識するとともに、そこで求められる新たな「個人」について議論している。同時に、本論では十分に検討できなかった幾つかの問題を振り返り、今後の研究発展の方向性を明確化している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、心理臨床における根本的問題である母娘関係に焦点を当て、著者の心理臨床経験から導き出された「ナルシシスチック・コントロール」、「マゾヒスティック・コントロール」という概念の理論的裏づけをはかるとともに、現代新たに課題となってきた幾つかのテーマについて考察し、それらに通底する母娘関係の今後の展開について言及しようとする、意欲的な試みである。

母娘関係は、心理臨床の領域に留まらず、人間関係全般を考えるうえでも非常に重要なテーマであり、かつ、「関係」を根幹としているがゆえに、様々な要因が錯綜する難しい領域である。この、重要かつ複雑なテーマに真正面から取り組んだことに、本論文の意義があると考ええる。

また、著者はすでに『母を支える娘たち』という著作を発表しており、そのなかで、「ナルシシスチック・コントロール」と「マゾヒスティック・コントロール」という観点を呈示し、そのアイデアはその後研究者によって多く引用される、ユニークなものであった。

今回の論文は、この「ナルシシスチック・コントロール」と「マゾヒスティック・コントロール」の発想の経緯を押さえるとともに、理論的肉付けを試みているが、そこに満足せず、さらなる探究をおこなっているところに本論文の価値が認められる。

そもそもこれらの概念は、著者の臨床的経験に根ざすものであったが、今回の論文においては、それについて理論的な裏付けをするのみならず、新たな事例を呈示するとともにその検討を行い、さらなる理論の深化が目指され、両コントロールの不幸な組み合わせを「共依存」という形で読み直し、臨床への提言を行っている。第4章で取り上げられる事例は、母娘関係にかかわる様々な主題を含んでおり、たとえば、母からの「自立」「妊娠」「介護」といったライフイベントに関連するものであり、さらに現代的な主題である「セクシュアル・マイノリティ」の事例を含む臨床実践である。こうしたアプローチは、極めて臨床的であり、実践に寄与すると評価できる。

さらに本論文は、科学技術の進歩による母娘関係にかかわる現代的な諸問題を、「不妊治療」「リプロダクティブ・ライツ」「セクシュアル・マイノリティ」といった具体的な切り口で掘り下げている。こうした現代的有り様は、母娘関係、身体性などの領域に大きな影響を及ぼしている。本論文は、こうした現代的課題にもしっかりと切り込んでおり、現代的意義があると認められよう。

ただ、テーマの大きさもあって、ともすれば議論が拡散し、深められないまま、新たな問題へと拡がっている傾向が、試問において指摘された。しかし、これらの

指摘は、本論文が扱っている「母娘関係」というテーマの重要性と複雑さに由来するものであり、本論文の価値を下げるものではなく、むしろ今後の課題を明らかにするものと考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 2 年 1 月 28 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。